■書き下ろし長編活劇

第五巡洋艦戦隊の栄光

宇宙戦艦ヤマト 前史2195

"Glory of the 5th Cruiser Squadron"
Pre-Story of the "Space Battleship YAMATO" 2195

T☆NOVELS Fantasia

隆

第五巡洋艦戦隊の栄光

宇宙戦艦ヤマト前史２１９５

I

惑星、アルファ・ケンタウリⅣ――

太陽系から離れる事四・三七光年、太陽系に最も近い可住恒星系であるケンタウロス座アルファ連星系唯一の人類居住惑星である。

地球人類がこの星に最初の足跡を印したのは今を遡る事一二〇年前の西暦二〇七七年。

最も初歩的な核融合ロケット推進方式によって駆動される第一世代の恒星間宇宙船は〇・五五Gという牛の歩みにも似たペースで長々と噴射の尾を引きながら傍目には長閑という表現が相応しいであろう加速の果てに、光速の一五パーセントの速度を得て、三七年もの時間を掛けてこの星に辿り着いたのである。

無論、それは二度と母なる星へと帰る事のない片道の旅であった。

発進時の質量の八七パーセントを失って最終的な目的地へと辿り着いた最初の恒星間宇宙船から降り立った開拓者の数は、僅か六人――

その、二年七ヶ月後にはアルファ・ケンタウリⅣの総人口は五三人となり、最初の入植から一〇年後の二〇八七年に漸く人口は一〇〇〇人に達し、開発基地パイオニア・ベースはこの時を境に人類初の外宇宙植民都市パイオニア・シティへと名を変えたのであった。

ＩＳＡ――国際宇宙機構（International Space Association）と呼ばれるアメリカ・ＥＵ・ロシア・日本・インドからなる共同事業体が主導する形で行われたこの最初期の恒星間植民事業は事業開始から五〇年目にあたる西暦二一二七年までに最大一〇万人の星間移民をこの惑星へと送り込む事を目的として更なる恒星間航行技術の獲得とより大型の移民船の開発に務め、その結果二〇七七年当時のロケット推進船が僅かに定員三〇人程、最大加速度〇・五五G、最高速度〇・一五光速を記録するのがやっとだったのに対し、新しい世紀を迎えた二一〇一年には磁場誘導プラズマ推進方式の採用によって定員二〇〇〇人、最大加速度三・二八G、最高速度〇・六二光速を発揮するに至ったのである。

それでも――

本当の意味での恒星間航行を完全に我が物とするには、先ずその第一段階として光速の一〇〇パーセント――即ち、秒速三〇万キロメートルという速力の発揮を成し遂げる事が絶対条件である事に変わりはなかった。

しかも、その光速発揮を実現した所で、まだ太陽系とアルファケンタウリの間には四年を越える――太陽系からの発進加速及び主恒星アルファ・ケンタウリＡへの接近減速に要する時間を加味すれば航宙にはそれでも五年を必要とするのだ。

そして、磁場誘導プラズマ推進による速力の向上は、光速の七〇パーセントを越えたあたりで頭を打ち始め、西暦二一二〇年代から二一五〇年代に掛けての実に三〇年間にも渡って技術開発は行き詰まりを見せる事になる。

それは即ち、特殊相対性理論の頸城の下でのみ行われてきた宇宙開発の限界をも又、意味していた。

物体の移動速度は秒速三〇万キロメートルを上限として変動する事はないとする特殊相対性理論からの脱却、それは従来の物理学の常識に真っ向から挑戦すると言う事の同義語でもあったが、その鍵は思わぬ所から齎されたのであった。

西暦二一五三年九月、銀河系中心方面の重力変位を観測していたアメリカ航空宇宙局（ＮＡＳＡ）の深宇宙観測衛星「オデッセイ」が奇妙な現象を捉えたのである。

最初、それは大質量天体の齎（もたら）す重力異常が生み出したノイズのように思われたが、観測を続けるうちそれは全く自然発生的に生まれた異常ではなく、何者かが意図的に引き起こした重力場の変動である事が確認される。

ＮＡＳＡの報告を受けて直ちにＩＳＡ加盟国は総力を挙げた観測体制の構築に着手し、二一五四年の春先には一応の成果を出すに至った。

それは、重力場の変動を用いて時空連続体に人為的な穿孔を行ない、超空間的に感覚上の距離をゼロ化する事によって達成されるリアルタイム通信の一部を傍受するのに成功したというショッキングに過ぎる内容だった。

それは即ち、これまで存在は予測されていながら確認はされていなかった未知の星間文明がこの宇宙に確実に存在する事の証明であると同時に、その文明が特殊相対性理論

の壁を越えて少なくとも超光速通信（FTL）の実用化に成功している、今の地球文明よりも優れた文明を持つ種族であると言う事が明らかになったのである。

だが、この報告書を認めようとしない勢力がいた。

それは、ＩＳＡに対抗して独自の宇宙開発を行ない太陽系及び近傍宇宙での覇権をＩＳＡ陣営と争っていたＩＳＵ――独立国家連合（Independent State Union）。中国、統一朝鮮、イラン等を中心とした新興諸国の連合体である。

ＩＳＵはＩＳＡの報告を宇宙開発及び星間植民の独占の為の方便、根拠の無い明らかな捏造と決め付け、合わせてＩＳＡが事実上独占状態にある木星系以遠の外惑星及びアルファ・ケンタウリの開発権の即時無条件解放と向こう五〇年間のＩＳＡによる宇宙開発の停止を要求したのであった。

無論の事、そのような要求は受け入れられる筈もなくＩＳＡ、ＩＳＵ両陣営間の緊張は急速に高まっていき、二一六一年ＩＳＵが大犬座方面に向け発進させた恒星間探査船「天狼（てんろう）」が太陽系離脱後三週間で消息を絶ち、その一ヶ月後、同船が不安定なエンジンの爆発事故によって沈没していた事が明らかになると、ＩＳＵはこれをＩＳＡの陰謀だと決めつけ、ＩＳＡ側の一切の釈明を認めず、ＩＳＡの「軍事的挑発行動」に対する報復の実施を宣言したのである。

実のところ、ＩＳＵとは異なりＩＳＡはその名が示す通り二〇世紀から二一世紀に掛けて主導的に宇宙開発を進めてきた主要国の関係機関が本格的な国際共同事業として実施した国際宇宙ステーション（ISS）建造を皮切りに相互の技術協力と事業の効率化を主眼に置いて設立した全く軍事色のない科学研究機関に過ぎなかった。

だが、人間は――特に常に疑心暗鬼という言葉と共に生きてきた旧共産圏諸国にその理屈は通用しなかったのだ。

かくて、二一六二年から二一六三年に掛けて地球――火星間の軌道上における両陣営の緊張はピークを迎え、二一六三年一一月、インド船籍の鉱物資源探査船「クシャトリアⅢ」が公海と定められていた筈の空間上でＩＳＵ警備艦に拿捕され、全乗組員がスパイ容疑を掛けられて拘留された上一方的な裁判によって船長と航海士が死刑判決を受けインド当局が抗議の声をあげる間もなく刑が執行された事で

緊張は爆発へと転換された。

西暦二一六四年二月、インド亜大陸から発射された一二発の大陸間弾道ミサイル[ICBM]は一分一四秒で高度一〇万メートルまで到達し、その頭部に搭載されていた各四基の多弾頭型再突入体[MIRV]を放出した。

発射から一分五七秒後から二分二一秒後にかけ、衛星軌道上に配備されていた中国人民宇宙軍の迎撃衛星が迎撃ミサイルの発射と体当たり攻撃によってそのうち七基を破壊。

三分九秒後、大気圏を突破して成層圏へ突入した再突入体に向け洋上展開していた人民海軍の防空巡洋艦から迎撃ミサイルの発射が開始されたが、その僅か一四秒後、ミサイル巡洋艦「深圳（しんせん）」の舷側に強烈な閃光が走り、直後「深圳」は船体を二つに折ってあっという間に南シナ海の海底へと姿を消していた。

「深圳」を撃沈したのはアメリカ太平洋艦隊に所属する原子力潜水艦だとも、日本国防海軍に所属する核融合潜水艦だとも言われているが現在に至るも定かではない。

いずれにせよ、「深圳」が撃沈されるまでの僅かな間に打ち上げた一一発の迎撃ミサイルのうち四発が目標を捉え、更に中国内陸部及び朝鮮半島各地のミサイル基地から打ち上げられた迎撃ミサイルによって九発が消滅し――二八発が目標へと落着して人為的な地獄絵図を地上に作り上げた。

網膜に映る何もかもを焼き尽くす強烈な閃光と数万度にも及ぶ熱風、生きとし生ける者全ての生存を許さぬ高濃度放射線の嵐、そして天高く沸き上がる禍々しいキノコ雲の下に北京、上海、厦門、南京、重慶、香港、台北、大連、長春、釜山、京城、平壌と言った諸都市は文字どおり消滅した。

報復はその二分後には早、開始されていた。

中国大陸内陸部から、朝鮮半島山間部から、南シナ海の海底深くから、相次いでミサイルの発射が開始され――その九割以上が、高度一万メートルに到達する前に跡形もなく蒸発させられた。

高度五万メートルから一〇万メートルに掛けての亜宇宙と呼ばれる領域に滞空するアメリカ宇宙軍及び日本国防空軍の弾道弾自動迎撃レーザーシステムが目視不可能な光の

銛を放ってこれらのミサイルを撃ち落としたのだ。
だが、こうした弾道ミサイルの応酬は後に第三次世界大戦とも地球統合戦争とも呼ばれるこの戦争におけるほんの一幕に過ぎなかった。

最終的に第三次世界大戦が終結したのはそれから三年三ヶ月後の二一六七年五月三〇日。
だが、六年にも渡る政治的緊張とそれに続いた戦争によって生まれた宇宙開発の空白は、ある意味で取り返しの付かない悲劇をも又招く事になっていた。
戦争の最中も、切詰められた予算の中でなお執念と情熱を持ってＩＳＡの宇宙技術者達は自分達が見つけ出した超空間通信の解明に取り組み続けていた。
戦場が地球上の、それも東アジアから中近東に掛けての一帯に集中した為に比較的安全地帯であった月のアームストロング・シティに拠点を置いた彼等研究グループは深宇宙の彼方から不定期に齎される、ノイズだらけで感度の悪い通信波のサイドローブを受信してはそれを解析する気の遠くなるような作業の果てに、幾つかの戦慄すべき内容を取り出すことに成功していたのである。
それは――遥か深宇宙の彼方で行われている星間戦争、それも圧倒的な科学力と戦力を誇る謎の宇宙艦隊の猛攻の前に今まさにこの世界から消え去ろうとしている憐れな種族の上げる断末魔の叫びであり、あるいは逆に狂暴な宇宙艦隊が誇らしげに本国に打電しているであろう勝利の一文であり、はたまた恐るべき侵略者の襲来に備える為周辺諸国に連帯と協調を呼び掛ける弱小国の悲鳴だったのだ。
今のところ未だ、この星間戦争は銀河系星雲の反対側――核恒星系を越えた五万光年以上も向こうの、人類にとっては未知の世界の出来事でしかないが、解析によって辛うじて「ガミラス」と言う固有名詞を突き止める事に成功した侵略者集団の魔の手が太陽系にまで及ぶ日が全く来ないとは誰にも断言出来なかった。
だからこそ彼等は、困難な仕事を成し遂げた誇りと自分達が見出してしまった将来の脅威とを真剣そのものの面持ちでそれぞれの本国に伝達し、更に現在行われている無意味な戦争に終止符を打ってＩＳＡ、ＩＳＵと言った関係を越えた地球規模での対策を行なうべきだと警告を発したの

である。
　だが、残念ながら報告を受けた為政者達はその警告に全く耳を貸さなかった――いや、多少は聞く耳を持った者達もいない訳ではなかったが、それでも彼等の感心は遥か三万光年彼方の戦争ではなく今、目の前で繰り広げられている戦争にあったのである。
　観測は尚も続けられたが、だからといってそれ以上何かが出来る訳ではなかった。
　湯水のように予算を食い潰しながらここ数十年に渡り、超空間通信のサイドローブ傍受以外では見るべき成果に乏しいＩＳＡに対し、参加各国の為政者達は冷ややかな視線を向け始めており、本来ＩＳＡに渡されるべき予算の大半が各国の軍部と軍需産業に渡されていた為、ＩＳＡは将来に備える如何なる開発も行なう事は出来なかったのだ。
　その結果、ＩＳＵ陣営――とりわけその中核を成していた中国と言う国家をこの世から消し去り、事実上政治的対抗勢力の抹殺に成功した戦勝諸国は大戦後、純粋な学術科学研究組織であった筈のＩＳＡを全く異なる組織へと作り替える事を決意する。
　略称こそ従来通りＩＳＡと変わらないが、正式名称を統一（Integrated Space Association）合宇宙機構と改められた新組織が、その目的を学術研究と宇宙開発から戦勝諸国による宇宙支配の為の存在である事に誰もが気付くまでに然程の時間は必要とされなかった。
　なにしろ、新しいＩＳＡはその発足の理念に置いて「全人類の新たなるフロンティアである宇宙への進出を一元的に統括し、同時に人類の獲得した宇宙空間の治安維持を一手に担う責任を負う」と明言され、更にそれを体現するかのように安全保障局隷下に航空宇宙軍（ＡＳＦ）が編成されたのだが、それはまだ大戦の記憶も新しい二一六九年初頭の事であり、多くの市民――この時期、殆どの市民は銀河系の彼方で行なわれている星間戦争の存在を知らなかった――は「中国を潰した位では飽き足らず今度はどこと戦争をしたいのだ？」と嘲笑を浴びせた程である。
　だがそれでも、為政者達の思惑がどうであれ航空宇宙軍の設立に安堵の表情を浮かべた者達がいたのも又事実であった。
　言うまでもない。

最初にガミラスの存在を突き止め、警報を発し続けてきた旧ＩＳＡの技術者達である。

だが、彼等の警告と存在は、この時点では非情にも黙殺される事になる。

為政者達が、この恐るべき深宇宙の彼方からの脅威を思い出すのはそれからかなりの歳月を経てからの事であった。

ＩＳＡの改組と航空宇宙軍の設立は、大戦の勃発によってその存在を半ば忘れられかけていたアルファ・ケンタウリを再び活性化させた。

主星である二重恒星アルファ・ケンタウリＡ／Ｂから離れる事〇・二一光年の距離にある伴恒星プロクシマ・ケンタウリに航空宇宙軍の艦隊根拠地が設けられた為である。

しかも、幸いな事に半ば地球からは忘れられた形ではありながらも細々と独自に続けられていたテラフォーミングと資源開発がそれなりの成果を齎しており、とりわけ中央大陸の赤道渓谷帯付近で豊富に産出されるこの星独自の希少金属（レアメタル）、オスミウムの存在は将来におけるアルファ・ケンタウリの繁栄を約束する物と誰もが思っていた程だった。

鉄の三〇〇〇倍の耐熱特性と二・二倍程度の硬度を持つ代わり、純鉄に比べると著しく磁性度が低いのがオスミウムの特性であるが、その性質は主に燃料配管や宇宙船・人工天体の外壁建造には最適で、プロクシマ・ケンタウリ根拠地隊（後年、正規の番号艦隊（ナンバーフリート）配備完結に伴って鎮守府に格上げされた）の建設事業においても主要施設の工事のほぼ全てにオスミウムが採用された事や西暦二一八〇年代初頭にはより価格の安い火星産の鉄鉱石を上回る対地球輸出量を記録した事から、この鉱石が二一〇〇年代中盤の宇宙開発にどれ程大きな貢献をしたかは想像に難くない。

同時に、二一七〇年代半ばから二一八〇年代初頭に掛けてはアルファ・ケンタウリ及びプロクシマ・ケンタウリからなるこの三重星系が人口において最盛期を迎えた時期でもあった。

恒星プロクシマ・ケンタウリは絶対等級一五・五、視等級一一という非常に暗い、即ち温度の低い恒星――赤色矮

星である為、人類の居住出来る惑星は主星から僅か六〇〇〇万キロ程度の距離を巡る第二惑星のみであった。

赤道直径二九〇〇〇キロ、自転周期五七時間、公転周期一七六地球日、離心率〇・〇〇三三というほぼ真円に近い軌道を描いて母恒星を巡るこの星の赤道付近に地上施設が設けられる他、南北両極に銀河系中心方向を向けて設置される巨大なレーダー施設やこの惑星の特徴である平均水深が一〇メートルに満たない泥海の海底地形を大型核爆弾によって破壊する事で最大五〇〇メートルの水深を確保し艦艇造修施設・泊地等を整備するこの一大プロジェクトは二一七四年に着手され二一七九年に第一期の工事が完了するまでに述べ五〇〇兆ドルの資金と四三〇万人もの人間が投入され、元々のパイオニア・シティ住人に加え「航空宇宙軍特需」を当て込んでこの星に雪崩れ込んできた多数の労働者によって二一七七年、遂にケンタウリ星系全体の総人口は五〇〇万人に到達した。

一方でこの頃になると、一〇年近く前に嘗てのＩＳＡの研究者達が発していた警報はそれを知る立場であった筈の人々の頭の中からも欠落しつつあった。

半信半疑、というより一パーセントに満たない信と九九パーセントを越える疑ではあったがそれでも最低限、深宇宙からの「非友好的」接触が起った場合に備えて、というお題目の戦力整備が行われていた筈の航空宇宙軍外宇宙艦隊（アウター・フリート）（後年の地球連邦軍（ＥＦＥＦ）太陽系外周艦隊の母体）の存在意義は次第に変貌し、今ではＩＳＡ各国の相互監視と非ＩＳＡ諸国への睨みというあまりにも矮小化されたものへと変わっていたのである。

それもその筈、航空宇宙軍の容赦のない追及の手を逃れて地下に潜ったりあるいは海賊化した旧ＩＳＵ残党にした所で、その活動範囲は精々太陽系の内惑星系どまりであり、木星以遠の外惑星系や冥王星系以遠のエッジワース・カイパーベルト帯では組織それ自体がそのような遠方での活動を支援出来る程のバックアップ体制を持たず散発的で小規模な行動を極まれに起こすのが関の山、そしてそれすら越えたケンタウリ星系では何をか言わんや、であったのだから。

それでも、航空宇宙軍の主力である航宙艦の開発と建造は滞る事なく続けられていた。

建軍当初は各国の宇宙軍が保有する形式も仕様もバラバラの航宙艦を寄せ集めて整備されていた艦隊だったが、二一七二年に月面のイーグル・ステーションに建設された内宇宙艦隊（ホーム・フリート）司令部と同時にお披露目された航空宇宙軍艦政本部の手による最初の正規戦闘艦、巡洋艦「デヴァステーション」が実戦運用に就いて以来一〇年でその規模は急速に拡大し、二一八〇年代の終わりには内宇宙艦隊に戦艦二二隻、巡洋艦五三隻、空母四隻、駆逐艦・フリゲート一三六隻が、また外宇宙艦隊には戦艦八隻、巡洋艦二一隻、空母一一隻、駆逐艦・フリゲート九二隻が配備されるに至ったのである。

これらのうち、外宇宙艦隊に特に空母が重点配備されたのはプロクシマ・ケンタウリ及び天王星系アリエルに根拠地を置く彼等の担当海域が非常に広範な星系外宇宙空間である事から艦艇の行動範囲に足の長い艦載機の行動範囲を加算する事で限られた戦力でより広い面積を受け持つ事を可能とする為であった。

ただし、残念ながらこれら第一世代の艦艇の殆どは従来通りの磁場誘導プラズマ推進艦であり最高速力は漸く〇・八光速を越えてはいたもののまだ光速の壁を破るには至っておらず、主兵装も大戦時とそう大きく変わる事はない最大射程五〇〇〇キロ程度のX線レーザーとミサイルが中心であった。

彼等が、最初の満足すべき戦闘艦を手中に収めたのは二一九五年の事である。

それは、あの凄絶を極めたガミラス戦争の幕開けと、ほぼ同時期の事であった。

Ⅱ

ガミラス帝国宇宙軍、東部方面軍第一一機甲師団艦隊（バンツァーディヴィジョン・フロッテ）・第一〇一突撃駆逐艦連隊（シュトゥルムゲシュッツ・ケッテ）を率いるアイゼングレーバー大佐は、駆逐艦「フェルザム」の司令官公室で受取った通信電文を見て眉を顰（しか）めた。

その通信電文は彼と彼の部隊が所属する第一一機甲師団